

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：小学生向けポスター教材「KIT・Kit」の製作と  
それを利用した地域交流の試み

事業者名：京都工芸繊維大学 美術工芸資料館

住所：京都府京都市左京区松ヶ崎橋上町1

TEL：075-724-7924

FAX：075-724-7920

HPアドレス：<http://www.cis.kit.ac.jp/~siriyokan/>

連携事業者名：京都市立松ヶ崎小学校  
(京都市立葵小学校)

会場：京都工芸繊維大学 美術工芸資料館

事業期間：平成21年7月1日～平成22年2月26日



## 1. 館の使命と本事業の関係

昭和55(1980)年に京都工芸繊維大学の学内共同利用施設として設立された美術工芸資料館は、本学の前身校のひとつである京都高等工芸学校が明治35(1902)年の設立以来収集してきた図案(デザイン)や建築関係の資料を収蔵し、調査・研究のうえ、それらを本学における教育・研究に役立てるだけでなく、展覧会という形式を通して広く社会に公開し、国内外のデザイン・建築研究者に情報提供をおこない、その教育・研究に貢献することを使命としている。

当館では平成19年度より、展覧会ごとに隣接する京都市立松ヶ崎小学校の児童を対象に美術教室を開催してきており、本事業は、当館の収蔵品の中核をなすポスターという社会性に富む題材を小学校の美術教育に活かし、今回の事業により、小学校及び地域との連携をより強固にし、持続性のあるものにしようとするものである。

## 2. 企画内容

### ①事業目的

本事業は、京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する東西の多様なポスターを用いた図工授業のための教材(KIT・Kit)を製作し、それを用いたワークショップを展開することにより、ポスターという社会性に富むメディアに対して小学生の目を開かせ、ポスターの制作を通して、みずからと地域とのかかわりを体験するような美術教育をおこなおうとするものである。

### ②事業概要

本事業は以下のような内容で構成される。

(1)小学生にポスターの意味・意義を教えるための学習教材の考案と製作

→ 美術工芸資料館が収蔵する古今東西のポスターを題材として、教材「KIT・Kit」を考案・製作する。(KITは、京都工芸繊維大学の英語名の略称)

(2)KIT・Kitを利用したポスター入門の授業とポスターづくり(平成21年12月20日実施)

→ KIT・Kitを用いて、ポスターの仕組み、文字と絵柄の関係などを学習したうえで、地元地域を紹介したポスターづくりをおこなう。

(3)制作したポスターの展示と地域交流(展覧会の開催 平成22年1月4日～1月14日)

→ 小学生が制作したポスターを美術工芸資料館1階の展示ホールに展示する。

保護者をはじめとする地域の人びととの地域交流会で、ポスターを制作した小学生がみずからのポスターを説明する。

(4)外部評価

→ 美術教育、児童画制作などに関心をもつ識者に対して、学習教材(KIT・Kit)およびそれを用いた地域交流の試みの経緯を紹介し、外部評価を受ける。

### 3. 事業実績

#### (1) 事業の主な内容及び日程

(1) 小学生にポスターの意味・意義を教えるための学習教材の考案と製作【 H21, 7～11 】

授業科目「博物館実習」の中でkit 製作の対象とするポスター作品（次の5 作品）を選択



ジェレ



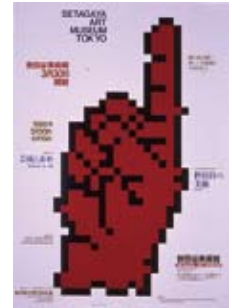
カッサンドル  
ノルマンジー号



亀倉雄策  
東京オリンピック



田中一光  
日本舞踊

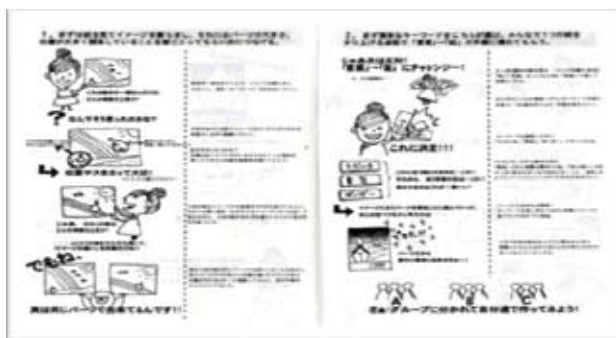


福田繁雄  
世田谷美術館  
開館記念展ポスター

(2) 上記5 作品に対して、博物館実習受講学生が作品ごとにグループに分かれ、それぞれの作品の特徴を示すキーワードをディスカッション、そのキーワードをもとにkit を製作



(写真上段は製作途中のkit と、下段はkit をより有意義なものにするため、とくに、限られた時間内に、基本的な知識が十分でない小学生に対して、どのようにポスターの特性を伝えるかという点に工夫をした美術教室実施のための絵コンテとシナリオ)



(3) 美術教室の実施【 H21, 12, 20(日) 】

#### ①導入

寒い日であったので、ウォーミングアップのために、実習学生と参加児童一緒になり、校庭で鬼ごっこをした。これは「東京オリンピック」のグループがKit 実施の際に用いる子どもたちの写真をとるための作業でもあった。

その後、ポスターとはどのようなものであるかという基本的なことを教える導入をおこなった。そこでは、ポスターとは、まず、人の目を引く（見てもらう）ことと、見たら何を伝えようとしているかがわかる、ということが基本であることを示した。また、実際に街中や駅の構

内で子どもたちが見かけたことのあるようなポスターを見せながら、ポスターのさまざまな技法についても紹介した。

## ②実習 1

児童をふたつのグループに分けて、「カッサンドル」「福田繁雄」それぞれのグループでKitを使用した実習を開始した。



「カッサンドル」グループは、画面のなかの構成要素の大きさや配置を変え、画面全体を縦から横へと変えることにより、見るものに対して印象がさまざまに変わることを教え、自分たちが再構成したポスターの印象をどのような「キーワード」で語るのがもっともふさわしいかを考えてもらった。

「福田繁雄」グループは、本来のポスターから指のモチーフだけを残し、文字を取り去ったボードを渡し、そこに児童が指のモチーフから感じとったイメージを文章にして、その指の周りにグリッドに合わせて書いてもらい、それにより、画像と文字との関係を考えるきっかけをつくった。



最後には、児童の作ったポスターと実物を比較して、子どもたちに感想を述べてもらった。

## ②実習 2

上記の二つのグループが、それぞれ「田中一光」「シェレ」のグループにわかれた。

「田中一光」のグループは、まず、田中一光のポスターを構成する四角、三角、丸という素材で人の顔を作る作業をしてもらい、そのうえで、ポスターが日本髪的女性を四角、三角、丸というパーツにわけて表現していることをパワーポイントで見せた。そのあとで、赤・青・黄・白の四角、三角、丸のピースを使い、子どもたちが「クリスマス・パーティー」というテーマでポスターを作成した。



「シェレ」のグループは、まず、ポスターの中の人物や文字、背景などの構成要素の大きさや色を変えた例を見せながら、それぞれの印象の違いを児童に述べてもらった。つぎに、古今東西の有名な絵画から切り取ってきたさまざまなパーツを児童の前に並べ、子どもたちが気に入ったパーツを選んで組み合わせ、そこに標語風の文字を入れてポスターを作った。



## ③実習 3

実習 3 は、参加児童全員で「オリンピック」グループの実習をおこなった。

まず、「東京オリンピック」のポスターを見せて、それが、写真を使っていること、スポーツの或る一瞬を捉えていること、そして、画面をトリミングしていることを示した。

その後、鬼ごっこの際に写した子どもたちの写真を用いて、自分たちなりの「鬼ごっこポスター」を作った。

また、できたポスターをプロジェクターで映写して、全員で鑑賞した。





④ポスター「そうだ、松ヶ崎行こう」の制作と展示（展示期間；H22, 1, 4～14）

上記の実習を経たうえで、子どもたちが地元で一番気に入っている場所を宣伝する「そうだ、松ヶ崎行こう」を制作した。

制作にあたっては、まず、子どもたちに A3 用紙に自由に松ヶ崎のイメージを描いてもらい、それに対して実習生が、どのような表現にしたいか（文字をどのように使うか、写真は使うか、トリミングをどうするか、など）を聞き出しながら、具体的な作品の構想を練っていく。



そのうえで、児童それぞれが、スケッチをしたり写真を撮りに行ったりという準備を進めて、制作をはじめた。デジタル画像は実習生がパソコンで処理したが、それだけではなく、子どもたちが書いたり、描いたりしたものもスキャニングをしてデジタル化し、最終的にはパソコンの画面上で構成して、B2 版の大きさに出力した。

これを額装し、他に取り組みの紹介パネルや kit とともに美術工芸資料館の 1 階展示ホールに展示し、小学校の先生やご父兄及び地域の方々と鑑賞した。



(2) 参加者の数

参加者人数

延べ 6 人

内 訳：京都市立松ヶ崎小学校児童、  
5 年生児童 5 名、  
1 年生児童 1 名

(3) 事業により作成した  
印刷物等

KITkit 5 種類、  
実施報告書

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事（右）

京都新聞 平成 22 年 1 月 6 日（水）（朝刊）19 面



#### 4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

Kit の内容およびそれを使った美術教室という点については、改善すべき点はあるものの、ある程度の効果はあったという手応えはあった。実習学生の頑張りや参加児童の熱意による面も大きいとはいえ、ポスターというものの多様なあり方の一端は理解してもらうことができたと思うし、展示を通じた地域交流も果たすことができたと考える。

そのうえで、今後考えるべき課題をあげれば、まず、今回作成した Kit を有効に機能させるためには、児童数と指導側の人数とをどの程度に設定すべきかという点があげられる。今回は、児童数に対して実習学生数が多かったために、密着して作業をすることができ、それにより児童の集中力と関心を維持させてゆくことができたが、児童数が多くなり、また、今回のように課題に興味を示した意欲のある児童だけが対象とならない場合に、どのように進めてゆくかという検討を事前にきちんと詰めておく必要がある。そのためには、早い段階で参加人員を把握することが不可欠である。そして、このことは各 Kit を使う時間の配分ともかかわってくる。

Kit 自体に関しては、今回の5種類はプレゼンテーションとその後の試行錯誤の結果、ある程度の完成度には達していたと考える。改善の方向性としては、「福田繁雄」チームのように文字を書くという作業は、対象児童の学年や漢字に対する興味の度合いにより、うまく行かない場合がありますので、それに対してどのように対応するか、また、「東京オリンピック」チームのように、児童がスポーツをしている画像を用いることが前提となっている作業をどのように円滑におこなうか、などがある。それに対して、コラージュにより児童にポスター制作をうながす「シェレ」チームの作業は、シェレのポスター自体からは離れるという点が指摘されるものの、児童の反応は良かった。また、「カッサンドル」チームの言葉とモチーフの大小や配置を考え合わせる作業や「田中一光」チームのカラフルなピースを用いたポスター作りは、児童にとって取り組みやすかったという印象を受けた。

なお、今回は小学校のカリキュラムの年度途中に割り込む形での実施となったため、正課としての図画工作の時間割に組み入れることが困難であった。そのため、学休日（日曜日）に実施することとなり、当初想定していた学校・学年単位での参加がかなわず、希望者（結果的に京都市立松ヶ崎小学校の児童6名のみ）による実施となった。

来年度は小学校ともより連携を密にして、今回の Kit を用い、さらに改善を図りつつ、より充実した美術教室を実施してゆきたい。

並木誠士（美術工芸資料館館長、申請代表者）

#### 反省点

○実習に参加した学生の反省には以下のようなものがあった。

授業科目「博物館実習」受講学生（「美術教室」実施担当）

- ・時間配分をもうすこし考えてから始めるべきであった
- ・他のグループの実習内容も共有して児童に接するべきであった
- ・準備した Kit のピースの特定の色が足りなかった。そのためには、両面にそれぞれ違う色を塗るなどの工夫が必要であった。
- ・文字で子どもの個性を引き出すのは難しい。
- ・対象児童の年齢により、Kit のあり方を変える必要がある。
- ・コピーなどで作ったものは使い捨てになるので、より無駄のない方法を考える必要がある。

### ○アシスタント（美術工芸資料館 学芸担当者）

パズルやレイアウトといったパーツを組み合わせることで画面を作っていくキットは、簡単な作業で自由に画面を作り、参加した子どもたちがポスター作品に親しみ、またその制作過程を知る良いきっかけになったように思う。改善すべき点としては、各キットの難易度にばらつきがあるため、対象年齢の設定が必要であると感じた。その設定があれば、小学校にアウトリーチをする際に学年の指定ができる。また、ある程度の参加人数の設定も同時に行いたい。キットを使う（受け入れる、この場合は小学校を指す）側の立場に立ち、キットがどのような特徴を持ち、誰を対象としているのかを明確にし、館内だけでなく館外においても提案、提供できるキットになるよう改善が必要かと思う。

しかし、博物館実習生を受け入れている他の美術館では、美術館の教育普及を実習期間中に行う時間は、多くて3日間、少ない館だと何時間かの講義になってしまう場合もあるという。

これに対して、当館では春から実習生とともに企画、製作にじっくり時間をかけて行うことができ、実習生の柔軟な発想を取り入れることができた。これは実習生にとってもだが、今回の活動が当館にとっても良い教育活動事業になった理由の一つかと思える。

### 評 価 書

#### 評価

前京都国立近代美術館  
館長 岩城見一氏、大阪大学総合学術博物館教授  
橋爪節也氏、明星大学造形芸術学部准教授 西村美香氏の三氏に、Kit の製作と実習の経緯を説明したうえで展示を見てもらい、代表して岩城見一氏より、右記のような評価を受けた。

評価者

氏名 岩城 見一

住所

評価年月日 2010年3月3日

〈所見〉京都工芸繊維大学美術工芸資料館は、内外の近現代の代表的なポスターをはじめ、近代建築・工芸資料を所蔵するわが国有数の博物館である。当大学は京都市北部の、かつては閑静な農村地帯であった松ヶ崎に位置し、近代以後この地域の文化の中心にもなってきた。松ヶ崎は、京都の夏の風物を代表する「送り火」の「妙」「法」が点る山の麓にあり、歴史的景観を誇る地域である。このような文化的歴史的な条件の下、地域に対するより密接な文化的貢献のために、当大学美術工芸資料館は、館所蔵品の展示のみでなく、数年前から地域の小学生に対する独自の美術・デザイン教育を試みてきた。

このたびその活動の一端が文化庁「美術館・博物館活動基盤整備支援活動事業」に採択され、今回の「KIT・kit」の試みが実現された。この試みには、工芸資料館の教員スタッフのみでなく博物館実習受講生も加わり、中でもデザインを学ぶ大学院学生が中心になって、松ヶ崎小学校の児童を指導しながら児童のポスター制作が実施された。また完成した児童の作品は資料館に展示された。

児童は大学院生との交わりを通して館所蔵の代表的ポスターからデザインの意義、その表現方法を学び、それに基づいて、自らが住んでいる「松ヶ崎」の中から特定の場所、文化遺産などを選んでポスターとして制作した。これは児童にとり、デザインによってももの見方、表現の意義を知り、また自らの生活の場を、日常とは別の視点から見直す上で、貴重な経験になったと思われる。また地域の人々にとり、児童の作品が資料館に展示されることで、大学の存在がより身近なものになり、また館所蔵作品の意義を知る機会にもなったであろう。

展示された児童の作品には、子どもたちが専門デザイナーのポスターから学んだ対象の見方やまとめかたがよく出ており、展覧会は教育についての興味深いヒントを与えるものになっていた。すなわち単に知識としてデザインや美術を教えるだけでなく、児童が実際に自ら実践的に優れたデザインを学び取り入れることの大切さが改めて示されたと思われる。このような地道で具体的な試みを通して地域との関わりを生み出してゆくことは、大学に学ぶ学生にとっても将来のヒントになると思える。

このような試みは継続が必要である。それによってこの試みは小学校および地域の教育に根づいたものとなる。今後の活動をも期待したいと思う。